

「源氏物語」と「虹いくたび」

川端康成の「源氏物語」体験

中 哲 裕

一

川端康成は「源氏物語」をどのように読んでいたのであろうか。

少年の頃から読みはじめ、戦争中も東京への往復の電車と燈火管制の寢床で湖月抄版本を繙いていた川端は「敗戦後の私は日本古来の悲しみのなかに帰ってゆくばかりである。私は戦後の世相なるもの、風俗なるものを信じない」と言う。「山の音」「千羽鶴・波千鳥」「虹いくたび」「美しさと哀しみと」「日も月も」「古都」など、戦後書き継がれた一連の作品は「源氏物語」や「枕草紙」或は能狂言などの日本の古典を大なり小なり意識して書かれたものであろう。中でも「山の音」「千羽鶴」と古典との関係を指摘する研究者は多い。しかし、「虹いく

たび」と源氏との関係について論じたものは少ないのではないか。

源氏と川端の作品とを比較研究する時、川端の側から源氏を見るか、源氏から川端を見るかでその相貌は微妙に異ってくる。「山の音」や「千羽鶴」と比べると「虹いくたび」は比較文学的にも注目されることは少ない。文学作品としての到達度の高さが前二者に及ばないと評価されているらしいことにもよろう。しかし、源氏の側から見た時、「虹いくたび」の美意識・題材・文章技法・思想と主題性にその影響はより多く及んでいると思われる、物語の世界と混然と融合して、作品としての完成度ということでも前両者に勝るとも劣らない。ここで「虹いくたび」が源氏物語から何を摂取したかということとを詳細に確認しておくことは、「今はただ日本の美し

さ、かなしさだけを書き続けよう」と決心した川端の戦後の創作活動の秘密の一端を明らかにすることになろうし、現代における源氏物語の享受の一面をも知ることができると思うのである。

二

「虹いくたび」は、冬の虹・夢の跡・炎の色・京の春・黒の椿・花の簪・桂の宮・生の橋・銀の乳・耳の後・虹の絵・秋の葉・川の岸・虹の道の十四篇に分けて、昭和二十五年の三月号から翌二十六年四月号まで「婦人公論」に発表された。これからの各篇はそれぞれの作品の内容を象徴する巻名が川端の美意識のもとに付されている。

「山の音」や「千羽鶴」と同様、源氏物語の五十四帖に帖名が付せられていることを意識したものであろう。「虹いくたび」の場合、物語の世界を想像させるいくつかの名称がある。

即ち、京の春は物語の舞台が京都であるということ、花の簪は篝火、桂の宮は明石の浦が模倣された離宮を舞台とするということ、虹の絵は絵合巻、秋の葉は紅葉賀、川の岸は宇治川に擬せられよう。冬の虹、夢の跡、生の

橋、虹の道は後にも触れるが夢の浮橋を予想させる。その他は源氏にはなく、川端独自の美意識から選びとられた巻名と言える。

第二に指摘すべきは、小説と物語に見られる時間意識の類似性であろう。

「虹いくたび」では、冬の虹から炎の色までが冬、京の春から銀の乳までが春、耳の後と虹の絵が夏、秋の葉が秋、川の岸と虹の道が冬で、巻末の虹の道と巻頭の冬の虹とがひびきあう。麻子が琵琶湖の虹を見るとところから始まり、巻末の電とあられの降る季節に虹の中心に向かって歩いていくというところで小説の時間は最初にもどり、小説の時間意識は円環的構造を示している。

一方源氏物語の場合、特に注目されるのは、源氏の栄花を象徴する六条院に見られる時間意識であろう。六条院は故六条御息所の旧邸を中心に造営された。東南の春の御殿には紫の上、東北の夏の御殿には花散里、南西の秋の御殿には御息所の娘の秋好中宮、北西の冬の御殿には明石の上が配置され、それぞれの御殿がそれぞれの季節にふさわしく造られる。そこでは六条院臨時客（初音・春）、春の御殿の船楽（胡蝶）、中宮の季の卿読経（同）、馬場殿での鏡射、螢の光のもとの兵部卿宮の玉鬘垣間

見（螢・夏）、野分きによる夕霧の紫の上垣間見（野分・秋）、帝の大原野行幸（行幸・冬）、薫物合せ（梅枝・春）など、四季折々につけてのみやびが尽くされる。一種の密室を形成する四方四季の館の六条院にも四季折々の催しによって物語が展開していく円環的時間が流れている。

季節の行事や雅びを展開することで時間を追いかけていった物語に対し、川端は先ず春夏秋冬の季節を設定し、そこに大徳寺や安楽寺、桂離宮や圓山公園、嵐山、大堰川など、千年の都「壺中の天地」の京都の風物を小説の背景として点綴したのではないだろうか。

三

川端は最初から最後まで小説の構想をきっちり決定してから執筆するというのではなく、書き継ぎながらほとんどどの長さの作品にまよめ上げていくというタイプの作家であったようである。言うまでもなく源氏物語も和辻によってその成立過程について疑義が呈されて以来、成立と構想にまつわるさまざまな仮説が提出されていた。詳細ないきさつは知らなかったとしても、物語が少

しづつ書き継がれて五十四帖になったのだということは常識として知っていたであらうし、物語作者のそういう執筆態度に自分に通ずる親しみも感じていたかもしれない。そういう事情に由来すると思われる不思議な痕跡がある。

……京都の女は水原の子供を産む前に、別の男の子を産んでゐた。今から後にも、また別の男の子供を産まぬとはかぎらない。
（五二頁）

水原との間に若子が生まれる前に、菊江には有子という女の子があった。従って本文の「男の子」は川端の不注意なミスか、小説の構想が変わっていったの止むを得ぬはづれともとれる。しかし、二章後の「黒の櫓」でそれが実の若子の姉の有子で、都踊に出るということ、また赤ん坊をひきとった大谷が京都からの帰途の東海道線の中で、見知らぬ若子を探しに京都へ行った麻子と出会うというところから小説は始まるのだから、引用の「男の子」はもち論川端の不注意なミスではなく、また構想の変化に伴う作品のはづれでもあるまい。それは源氏物語の成立の事情を睨んだ上での作者の意図的なミスとも言

うべきものなのではあるまいか。

第四に、文体の性格についても両者の類似性は指摘できる。

源氏の文章は漢詩や和歌、催馬楽などの俗謡を地の文に混融し、抒情性の高いものになっている。また登場人物の唱和や独詠によって更にその抒情性はすくいとられ、しかもそれらの歌が場面の磁場の中心をなしているということも今更言うまでもあるまい。

「虹いくたび」の場合、抒情的な和語主体の川端本来の文章の中に、情況に応じていろいろな詩が混融している。ここでは特に注意をひいたいくつかについて確認する。

……原子爆弾、水素爆弾の破壊の下にある、建築家の運命といふこともあった。

「この家を捨て、かの家を捨つ」。

といふ佛の言葉も、このごろは水原の頭に去来してゐた。
(四〇頁)

麻子と熱海の温泉宿へ行つて、水原が遺言の家を作りたと言つた次の日の朝のことである。「この家を捨て、

かの家を捨つ」という仏の言葉は、「いづこより来り、去つていづこに行く」という良寛の言葉(伴も)を咀嚼し暖めた川端流の言いかえの表現であろう。水原の科白としてふさわしいものであるかどうか。むしろ、「百子の子供のことを麻子にも知らせないために、父は百子を京都へつれてきて、京都に残して行つたのだらうか。百子は帰る家がないやうに思へた。」(二三九頁)という百子の心理に、よりひびきあう言葉である。そして更に言えば「身を投げし涙の川の早き瀬をしがらみかけて誰かとどめし」「なきものと身をも人をも思ひつつ捨ててし世をぞさらに捨てつる」という浮舟の出家前後の歌とも深いところでひびきあっているのである。(伴も)

「一輪の花美しくあらば、われもまた生きてあらん、
といふ言葉もありますからね。」 (二四一頁)

「花は眠らない」という小文に「夜なかの四時の海棠もありがたいとしなければならぬ。一輪の花が美しいならば、生きてゐようと、私はつぶやく時もある」と言っている。(伴も)「一輪の花」は当初、薄紅色に咲く海棠の花であった。小説の中では茶室の一輪の椿として連想さ

れているふしも見える。しかしこの場合、具体的な花のイメージは抜け落ちて、作者名の伏せられた一行の詩として夏二によって紹介される。桂離宮で啓太と百子の恋を回想する麻子と夏二の詩としては唐突に過ぎよう。この詩がふさわしいのはやはり百子でないだろうか。作者と百子のところがこの詩を介してひびきあっているのである。

……愛に悩んで、瀬戸内海に身を投げた詩人、生田春月が恋人を歌った一行である。自ら死んでゆく詩人はその女の人を、

——きみは死ぬべき人ならず、

きみはいのちの恋の妻。

と、絶筆に書き遺した。

「きみは死ぬべき人ならず。」

そのやうなことを、竹宮少年は麻子に言ったらしいと、百子は少年が死んでから思い出した。(二一八頁)

少年の子供を宿した百子は青木に出産は無理であるとさとされ入院する。麻子の手紙によって少年の自殺を知った百子は、身体の中から血を流した時に少年も命を絶

ったのではないか、「冥土の道があるなら、女じみた少年の父は、形のとのはぬ血の子を抱いて、さまよって行つただらう。「僕は子供だもの。」と、父はつぶやきながら……」(二二二頁)と思う。葦丸船上より播磨灘に身を投じた三十八才の生田春月の詩が百子によって反芻される。少年は病院の麻子に自分は死んでも生きていてほしいと言つたという。しかし、啓太や竹宮の故に死のうとして果たせなかつた百子は、啓太と竹宮の生き残つた自分への声としてその詩に耳を傾けている。そしてそれは、眠ることなく夜を明かして「われもまた生きてあらん」とつぶやく川端の声とも木魂しあっているのである。

その他「語られざる愛は必ず成る」(一四七頁)というブレイクの詩も、「私は恋の痛手をいやすために、あらん限りの努力をしてみたいと思ひましたとき、初めて自分の恋の深さを知りました」(一八〇頁)というぼろとがる文も、「ささいなことが私たちを慰めるのは、ささいなことが私たちを悩ますからだ」(二二六頁)「大病をして死を身近に感じると、深くたしなめられた気持がして、それまで重大に思へたことが、さうではなかったと悟るやうになるものだ」(同)という言葉も、それら

を中心にして抒情性の磁場を形成して小説の文章に混融する。いずれも百子の心理に流れこみ、ひいては作者の川端の心象風景とも共鳴しあっているのである。

四

源氏物語の現代語訳を試みようとしていた川端は、宇治の世界、殊に浮舟の生き方と百子の生き方を重ね合わせて小説を書いていたふしがある。

第一に、百子も浮舟も継子であるということである。

水原は三人の女性と恋し、三人の女の子をもうける。一人は百子の母であり、水原との恋に敗れて自殺。次いですみ子と恋し、彼女を人籍。麻子が生まれる。外国に単身出張し、さびしさから実家の百子をひきとり、百子と麻子は同居することになる。

また京都の菊江とも関係して若子が生まれる。二人の姉は若子の存在に気付いているが、はつきりとは知らされていない。小説は水原を中心として、それぞれ母親のちがう姉妹が主人公である。

一方、宇治の物語は大君の物語と浮舟の物語に分けられる。八の宮は北の方との間に二人の女子を持つ。北の

方死後、後妻は迎えないが中将の君との間に浮舟をもうける。宮との愛情に敗れて常陸介と関東に下った母親の手で浮舟は育てられる。成長して京都に帰り、中の君のもとに身を寄せた時、既に父も大君もこの世の人ではなかった。宇治の物語も八の宮という共通の父を持った異母姉妹、大君・中の君と浮舟の物語である。小説が継子の物語に題材をとっているということ、川端が早い頃から両親と死別して孤児であったということと無関係ではあるまい。

第二に小説にも宇治の物語にも、川や湖といった水の連想が働いている。

父と箱根の宿に來た麻子は、朝もやの中をボートに寄り添って乗っている姉と少年を発見する。また青木と大堰川のほとりを歩き「死んだ啓太にも罪を負わせよう」とさとされる。そして料亭「ほととぎす」で若子と会った時、冬枯れの窓の風景からは川音が聞えてくる。

物語では、薫と匂宮との板ばさみになった時、死への傾斜と比例して宇治川の川音が、浮舟の耳に増幅される。「美しさと哀しみと」でも、音子の弟子のケイ子と大木の息子の太一郎が琵琶湖に船を出して遭難する場面が描かれる。水の流れは汚れや罪の意識を浄化する。入水譚

を経験してはじめて浮舟救済の物語が書かれるのであり、嵐山の川音は百子の人間社会への信頼の回復と復帰を予見し、包み込んでゐる。

第三に、小説も物語も実生活の描かれない恋の物語であるということ。

水原の出会った三人の女性との恋は小説に書かれることなく、中心は百子の愛憎の遍歴である。父との愛情に敗れた母の情念を百子はこころの基底に持ち、その抑圧された思いが屈折して啓太を愛することになる。啓太の死後は弟の夏二へ、更に西田や竹宮ら年下の少年達へとむかう。百子の遍歴は一本の糸でつながっているが、二十五・六歳の若い女性が旧制高校程度の少年をつれて泊り歩くという情況が、敗戦後の昭和二十五年前後に一般的に言つて可能であつたかどうか。もっとも実際の生活感覚が抜け落ちてゐるのは川端の作品の特徴でもある。

一方、大君を亡くした薫は妹宮の中の宮を追ひ、中の君から異母妹の浮舟の存在を知らされて浮舟に大君の形代としての面影を求めていく。形代の技法を川端は源氏から学んだということは一 Generally 言われる通りである。

源氏に描かれるのは貴族の生活なのだから、現代的な意味での実生活が描かれないのは当然であろう。浮舟は薫

と匂宮との愛情の板ばさみになつて宇治川に身を投げる。二人の男性に言い寄られ、いずれをも選ぶことができなくて身を滅ぼす物語は、侍女達の風説のように異常な事件として物語で取り扱われる。

第四に、両作品の背景の色調として、零落・没落のイメージがあるということである。

水原が麻子と熱海に出かけた時（冬の虹）、熱海のもとの宮殿下、侯爵家、藤島財閥の豪邸が持ち主の手を離れて宿屋にかわり、沈丁花や紅寒桜が咲いていた。伊賀侯爵の家は、戦前、熱帯風の庭園が作られ、温泉の湯をひいて年中暖房がきいていて、「寒帯に熱帯の花」が狂い咲くような風情であつたという。侯爵は英語の論文を二世のタイピストに口述筆記させていた。しかし、日本人ばなれした侯爵は滅び、藤島財閥の人達の「夢の跡」も敗戦によつて焼け失せたのだった。水原は麻子のために「遺言」のような家を建ててやりたいと思う。

また、娘二人に都踊の切符を残しておき、水原は大徳寺で菊江に会う（京の春）。戦後の大徳寺の荒廃は著しい。子供のために国宝の桃山の門も塔頭の屏も無残にいためられて修繕のほどこしようなない。自動車も山内に侵入して荒れ放題の様子である。

また、父に連れられて三条に宿をとった百子は、その女中が潜水艦の司令の海軍大佐の娘だと知る（秋の葉）。夫は軍艦で戦死。母も亡く、大佐の娘は特別の通いとして女中に奉公しているという。

一方、八の宮は源氏の弟である。冷泉院の春宮の頃、朱雀院の太后の「横ざまに思しかまへ」でこの宮を立太子させようという陰謀があり、敗北する。以後、六条院の栄花の世に宮廷社会との交際を断ち、仏道修行に邁進する。鐘の音と川霧に包まれた宇治は、「世をうち山」と喜撰法師のうたった歌を連想させる。「うち山」が「宇治」と「憂し」と懸け詞になっていることは言うまでもない。その薄明の異境に、宮の道心を介して薫が通うようになり、大君・中の君を発見し、浮舟を隠し置くのである。浮舟と「夢の浮橋」のいずれも「浮く」舟・「浮く」橋であると同時に、「憂き」舟・「憂き」橋であったのである。

以上、小説の世界と同様、物語の背景の宇治も、零落、落魄の色調に色どられていたと言い得よう。

五

小説と物語の主人公には、いずれにも何らかの罪障意識が荷わせられている。

夏二とのテニスに夢中になって肋膜炎患った麻子の病室に、ミレエの「春」がかかっていた。その絵を見て百子は少女の頃を回想する。実姉でない七歳の時に知らされて、急に優しくなった麻子に百子はうち明けるのが早すぎたと後悔する。「いつも麻子からなにか盗んでやるやうで、気がとがめ通しだった（一八八頁）百子は、「小さい麻子の思ひやりがわかるから、一生裏切るまい」（一九一頁）「継母が生きてゐたあひだ、父に近づくまい、親しむまい」（一九三頁）とひそかに自分をおさえてきたのだった。母の異なる麻子と父の愛を争っているかの如き「怪しい炎」を幼ない頃から抱き続けた百子は「自殺した母の愛に乗りうつられたのが、自分の運命だろうか。父と継母との愛、父と異母妹との愛を、自分は母との二人分、嫉妬し通してきたのだらうか」（六八頁）とも思う。

そんな百子が特攻隊として死んでゆく啓太と出会う。出合いに関するいきさつが書かれないのは源氏の方法を真似たものであろうか。^{注10}とまれ啓太にも母はなく、二人を結び付けたのは母の思い出である。戦死した啓太の後

を追って青酸加里を飲むが、継母のささやかなこころ配りで命長らえる。「戦争で死なせるなら殺しておけばよかった」(二五七頁)と思う百子は、「自分のかなしさを、自分が勝手に育ててしまい」(一一四頁)啓太の死から受けた打撃から立ち直れない。

敗戦後、年下の少年と次々と遊び戯れる百子を見て水原は「刃物を噛むやうな危い遊びをするのは、なにか傷が痛むからだ」「百子の胸のほんたうの傷を見つけてやらないと、火遊びはやまない」(四九頁)と言う。そして、百子の妊娠。それを知って少年も自殺し、後に「謎」を残す。

啓太の死も竹宮の自殺も百子のせいではない。しかし三つの生命が減んだのは事実であり、とりかえしのつかぬ寂しさに襲われる百子は少年の子供を生かしておくのであったと後悔する。啓太と竹宮は死んで、「死者に傷といふものはなく、心の傷は生者だけのもの」(二二六頁)になった。

百子が啓太の父と最初に出会ったのは圓山公園の左阿弥である(桂の宮)。啓太の戦死したことをわびねばならないという青木を見て「啓太の亡霊と、心理ばかりで斬り合ってたのが、なにか力抜けるやう」(一三〇頁)

にも感じていた。その青木が百子のこの危機を救うことになる。青木は生きている者の一切の罪と苦しみを死者にも負わせようと言い、

「愛する者を地獄へ落さないために、自分が地獄に落ちるといふこともあるでせうね。私はかう考へる時もあります。人間の罪悪や苦悩なんて、自分で創造したり、発明したりするのは一つだってない。ことごとく先人を真似、先人から受けついでものだ。死人がのこした伝統と習慣ぢやないですか。」(二三八頁)

と、言う。

人間のかなしみや苦悩が極まって、宗教的にも深められた罪悪感・罪障意識に転化している様子がうかがえよう。それは「女ばかり、身をもてなすさまところせう、あはれなるべきものはなし」という、紫の上の「女の身の宿世」をめぐっての人間認識・世界認識に通ずるものがある。紫の上も六条院の秩序の崩壊の過程を自らの生の苦悩として受けとめなければならなかったのである。

入院前に百子が父と青木の茶室を訪れた時、床の間には「過去現在因果経」が飾られていた(秋の葉)。啓太

を供養するためのものである。しかしそれは、人間の苦悩が自分で創造したり発明したりするものではないということ、めぐる因果の糸に導かれて先人から受け継ぐ伝統と習慣であるということを象徴する絵経でもあったのである。

一方、物語の方はどうであったか。

桐壺の更衣に似ているということで入内してきた藤壺の宮と光源氏との関係が第一部の主題を支えるマグマとして埋め込まれていることは言うまでもない。二人の間には冷泉が生まれる。しかし宮は源氏にとつては義母にあたり、「天つ罪・国つ罪」の「己が母犯せる罪」を犯すことになる。同様に、複雑に屈折した百子の父へのおもいは、自殺した母を介しての近親相姦の罪のにおいが、小説の原点に据えられている様に思う。

また落日の六条院の秩序の崩壊の果てに源氏が見たものは、正妻格として遇していた若い女三の宮と柏木との密通であった。生まれてきた子供を抱いて、それが昔日に藤壺と犯した罪の「この世での応報」であると知る。

宇治の男主人公は、この女三の宮と柏木の密通によって生まれた薫である。源氏の晩年の子として栄花を約束されながら、母の若い尼姿や身辺の人々の気配で自らの出

生の秘密をいぶかしみ、存在への不安感の故に仏道に志し、宇治へ通う。しかし大君は死に、中の君は匂宮と結婚し、浮舟は宇治川に入水する。罪の子薫は、両親の罪を荷って宇治では愛を得ることはできない。源氏と藤壺との間に犯された罪が、やはり因果の糸に導かれて薫の存在を強く縛りつけていることに気付こう。

そして浮舟。母親の中將の君は、八の宮との間に生まれた子を通して常陸介と再婚。関東で成人した浮舟を、昔の縁故から中の君にあずける。大君の面影を宿した浮舟を薫は自分の手もとにひきとる。しかし匂宮にその居所を知られて薫に扮する匂宮の通うところとなる。情熱的であけっ広げな匂宮にこころ魅かれながらも、八の宮との不幸な愛情経験の故に薫との関係をよるこぶ母親との板はさみになり、終には匂宮との密通をも薫に知られ、身の破滅を知って宇治川に入水。先にも融れたように、川端の小説と同様、宇治の舞台は薫にとっても浮舟にとっても罪に色どられた「憂し」の世界であったのである。しかし浮舟の入水によって物語は終わったわけではない。長谷詣での途中の横川の僧都の一行に、浮舟は救われる。正体不明の瀕死の女性を見て僧都は、

……池におよぐ魚、山になく鹿をだに、人にとらへられて死なむとするを見つつ助けざらむは、いと悲しかるべし。人の命久しかるまじきものなれど、残りの一二日を惜しまずはあるべからず。鬼にも神にも領ぜられ、人に追はれ、人にはかりごたれても、これ横ざまの死をすべきものにこそはあんめれ、仏の必ず救ひたまふべき際なり。^(往世)……

と、さまざまに介抱の手を尽くす。

浮舟救済の場を後に川端は「美の存在と発見」で二度にわたって言及し、「鬼や神に、しようのない煩惱にとりつかれ、生きる道を失い、自己の命をたねばならないような人間、そういうしょうがない人間こそ、仏の救う人間なのだ。それは大乗仏教の核心であるとともに、紫式部の確信でもあったかに見える。」^(往世)という梅原猛の評をそのまま引用し同調している。啓太や竹宮との愛情に敗れて、孤独な百子の苦悩・罪の意識を救う青木は、瀕死の浮舟を救う僧都を参考に造型されたのではないか。小野の山里に身を寄せた浮舟を、かつての尼君の娘婿の中将が発見する。その中将の手から逃れるために更に僧都に懇望して出家する。その前後の浮舟の歌が水原の

「この家を捨て、かの家を捨つ」という言葉とひびきあっているのは先に指摘した通り。

浮舟の出家に躊躇した僧都であったが、果して都の薫の知るところになり、浮舟との仲介を依頼される。しかし、浮舟は薫の手紙をもたらし弟の小君に会うこともせず、帰してしまい、彼岸と此岸との間に揺れ動く浮舟のこころを描いて物語は終る。

百子は若子と会えるように青木に依頼していた。しかし「ほととぎす」で姉妹の盃をすすめられても、若子は盃を手につかない。百子はそういう若子の様子に「清く激しいものに貫かれた感じ」(二四八頁)がする。この青木を介しての姉妹の出会いが、僧都を介して再会を求める薫、そしてそれを拒否する浮舟を描く「夢の浮橋」と同じ構図を持っているということははや言を俟たない。

六

「虹いくたび」の中で、実景として描かれ重大な意味を荷っているのは、麻子が京都からの帰りに見た琵琶湖にかかる冬の虹である。光の縁の高さだけ立ち、根もなく浮んでいる虹は「花やかなかなしみが雲を呼んで昇天

するかのやう」（一四頁）であった。本来は夏の季節の虹が根もとからぶつりと切れている不気味な様子から「魔王の恋」のようだと大谷に評される。言わば狂い咲く百子の恋を象徴するものであらう。

ミレエの「春」の色刷りの絵は春の虹であった。父の家にひきとられた時、その絵を見て花やかな生活にはいる喜びがあったのだが、継子の百子のころに描いていた虹は消えた。萬物生成の春を祝福する虹はむしろ麻子の荷う世界を象徴するものであらう。

百子を象徴する冬の虹と麻子の春の虹とが美しく交錯するのが「虹いくたび」の世界である。小説の主題を荷っているのは当然百子の世界である。小説は傷付いた百子の心象風景を主旋律としてかなでながら麻子の春の虹を遠くに見つめて、しかもなおそこには至りえない。戦中・戦後を通じて中断されていた都踊が七年ぶりに復活する。「よろこびて歌詞をつくらむ、若き日の祇園風流を思ひ出でつつ」（一一〇頁）という吉井勇の作詩にしても、「和ぎし昭和の御氏も、二十五の、年を重ねて新しく、ふたたびここに舞姿」（一一一頁）の置歌も、「それ満城の春の色、この一廊に寄るとかや、かの圓山の老桜の、命のほどは歎けども……」（一一五頁）の歌詞に

しても、それら一連の戦後の復興をよるこぶうたの言葉は、麻子に通ずるものはあっても、百子の世界にはほど遠い。

戦争で敗けて川端は「もう日本のかなしみしか歌はない」と言ったことがある。その敗戦の年に島木健作が死に、翌二十一年に武田麟太郎、二十二年に横光利一、二十三年には菊池寛も死ぬ。長い間の知友と先輩の死にainaがら、彼もいつの日か孤独に耐える百子の様に自殺を思ったこともあったのではないだろうか。眠られぬ夜明けに美しい海棠の花を見て「一輪の花美しくあらば、われもまた生きてあらん」とつぶやきながら、祈るように一日一日を生きていた時があったのではないか。

そしてそういう川端が二度自殺未遂を経験した風狂の人、狂雲一休に親近し、また薫と匂宮のいずれをも選ぶことができなくて入水し、人間的な暖かみとやさしさを備えた僧都に救われて彼岸と此岸との間に漂う浮舟の物語の方法を、自らの小説の方法としてとり込んだということは十分あり得たのであった。

「虹いくたび」という小説の題名も、余韻を残したまま閉じられる物語の最終帖の「夢の浮橋」とイメーヂの上ではひびきあっているのである。

(注)

1. 「哀愁」(昭22. 10月)『川端康成全集第二十七卷』(新潮社刊、昭57年) 三九一頁、以下本文は新潮社版の全集に依る。
2. 上坂信男『川端康成——その「源氏物語」体験——』(右文書院、昭60)、榎本富士子『川端康成の古典文学への親炙——「千羽鶴」を中心に——』(『文学・語学』第一二二号、昭61)、塩田良平『川端康成と古典』(『現代文学と古典』読売新聞社刊、昭45)、平山城児『川端文学と古典の世界』(長谷川泉編『川端康成作品研究』八木書店刊、昭48)、志田延義『紫式部から川端康成へ』(『志田延義著作集』の中『文学史・文学論』至文堂、昭57) ほか
3. 「古都」の中での表現である(『全集第十八巻』二三四頁)
4. 「源氏物語について」(『日本精神史研究』岩波書店刊、大15)
5. 『川端康成全集第十一巻』(新潮社刊、昭55) 以下「虹にくたび」の本文はこれに従う。且し、傍点は筆者による。「別の男の子」は「別の、男の子」で

はなく、「別の男の、子」であろうと、後に川嶋至先生から御教示賜った。前後の文脈からは確かにそのようにも読みとれそうであり、だとすれば、この条項は落ちる。あつくお礼申し上げます。

6. 『全集第二十八巻』四九二頁
 7. 「美の存在と発見」に川端のこの歌への言及がある(『全集第二十八巻』四〇三〜四頁)
 8. 『草月人』(昭25. 5月号)に発表された。引用本文は『全集第二十七巻』四一七〜八頁
 9. 例えば、前掲の榎本富士子論文。
 10. 例えば、源氏と藤壺、六条御息所、朝顔の宮との当初の関係は書かれていない。
 11. 日本古典文学全集本『源氏物語(四)』四四二頁(小学館刊、昭49)、以下『源氏物語』の本文は小学館本による。
 12. 『源氏物語(六)』二七三頁。
 13. 『全集第二十八巻』四一一〜二頁、梅原猛の文章は「煩惱の鬼ども——『源氏物語』(『地獄の思想』中公新書、昭42、一二六頁)
- (原稿受付 昭和六十二年三月三十一日)